

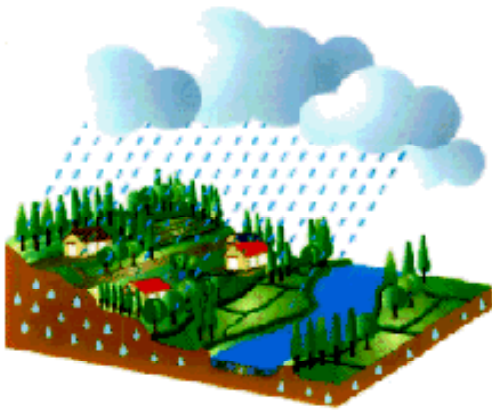
4 - 4 今後の内水対策

内水対策は、流域全体の街づくりの中で流出抑制を行っていくことが重要

吉野川における内水対策事業は、昭和36年の第2室戸台風を契機として、昭和39年に完成した川島排水機場を皮切りに順次実施してきましたが、依然として内水被害は発生しています。その原因は、排水機場が整備されると内水被害が解消され、これまで田畑であった低平地に住宅が進出し新たな被害が発生してきたことが考えられます。

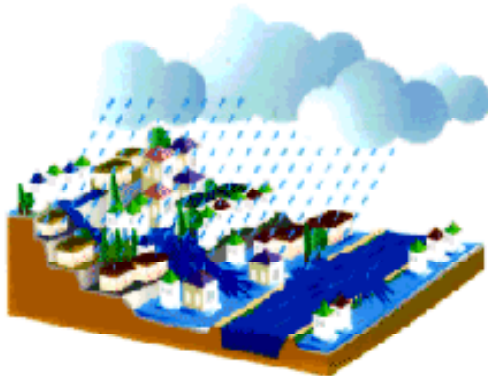
したがって、内水被害を軽減するためには排水機場整備もさることながら、各流域における街づくりの中で流出抑制策等を行っていくことが重要であると考えています。

流出形態の変化



むかしは

山、森、林、田畑がスポンジのように水を吸い込んでいたので、雨が降ってもすぐに川の水が増えるようなことはなかった。



最近では

ビルや建物がたくさんできて、地面がコンクリートやアスファルトで覆われるようになったので、降った雨がそのまますぐに川へ流れ出て、洪水がおこりやすくなっている。

河川事業以外の流域で出来ること

洪水を防ぐには、河川改修もさることながら流域内で雨水を一時的に蓄えて洪水を防ぐことも重要である。

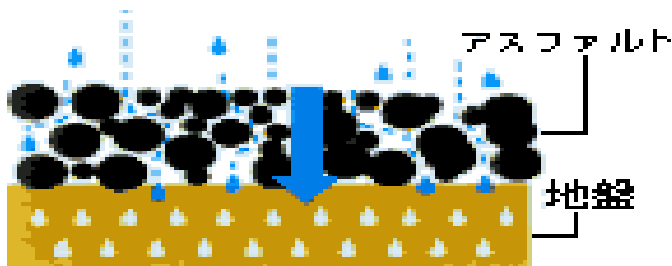


校庭・駐車場・公園などを利用して降った雨を一時的に貯めて少しずつ川に流すようにする。こうすることで、一度に川へ水が流れることを防ぐことができる。

ため池の貯水能力を増やすことにより、降った雨をしばらくの間貯留し、徐々に川へ流す。



透水性舗装



舗装を透水性にすることにより、降った雨を地下に浸透させ、河川への流出量を抑制する

流出抑制対策の例



防災調整地

(奈良県香芝市 旭ヶ丘調整池)

ため池の保全

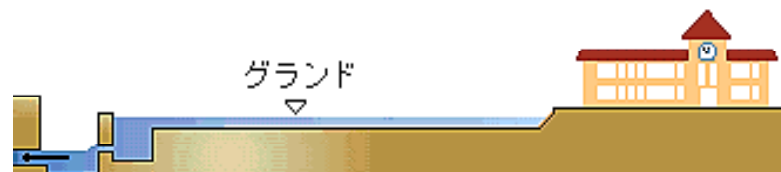


(奈良県広陵町 馬見丘陵公園池)



雨水貯留浸透施設

(奈良県天理市 立波市小学校)



透水性舗装

(奈良県斑鳩町 役場前)

